

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(4 年計画の 2 年度目)

1. 研究課題

(和文) 第一次世界大戦の総合的研究

(英文) A Trans-disciplinary Study of the First World War

2. 研究代表者

(氏名) 山室信一、岡田暁生

3. 研究期間

平成 22 年 4 月 から 平成 25 年 3 月 まで

4. 研究目的 (400字程度)

本研究は「世界性」および「現代性」を切り口として、第一次世界大戦とそれが与えた二〇世紀社会へのインパクトを明らかにしようとするものである。「世界性」とは、ヨーロッパの戦争にアフリカやアジア（オーストラリア・ニュージーランドを含む）の人々が大量に動員されたとか、戦線がアフリカやトルコにまで広がっていたといったことだけではない。第一次大戦を視察した日本の軍人が「総力戦／持続戦（永久戦）」というビジョンを膨らませていき、それがやがて15年戦争に至るとか、あるいはこの「永久戦争」のビジョンとは逆に「恒久平和」が模索されるようになって、第一次大戦後の国際連盟の成立になるとか、第一次大戦における「ヨーロッパ文化の没落」が非ヨーロッパ地域の人々にとってある種の解放感を与えることになるといった、現代にまで至る「事後的」で「グローバルな」インパクトを視野に入れない限り、ヨーロッパの国内戦争を超えた世界戦争としての第一次大戦の意味は見えてこない。この「現代性」および「世界性」という二つの切り口から第一次大戦を眺めることが、本計画の基本スタンスである。

5. 本年度の研究実施状況 (400字程度)

本年度は合計16回の研究会を催した。そのうち6回は、従来の研究成果の総括として人文書院より出版した「レクチャーシリーズ 第一次世界大戦を考える」全6巻の合評会にあてている。この合評会は毎回、外部より二人のコメンテーターを招待し、さらに公開形式とすることで、より広い角度からの意見を集約し、今後の研究会の方針に反映させることを目的としている。

また2011年度には、ベルリン自由大学によるInternational Encyclopedia of the First World War 1914-18プロジェクトとの研究提携を開始した。これは従来の戦史中心／ヨーロッパ中心／ナショナル・ヒストリー中心的な第一次世界観を克服すべく、思想・芸術も射程に入れつつ、第一次世界大戦における「世界性」に焦点を当てた総合研究を目的としており、その成果はOxford Pressから出版の予定である。なお班長の山室信一は本プロジェクトにおける「東アジア」の項目のEditorial boardとなっている。

6. 研究成果の概要 (400字程度)

報告書のとりまとめも念頭に置きつつ、2011年度はこれまでの研究における知見が示す方向性を検討し、海外における研究動向の中での本研究会の独創性を改めて位置づけ、それとともに今後の課題を洗い出すことに、とりわけ重点を置いた。本研究会が打ち出した認識や方向性は、ひとまず「世界性」「総体性」「継続性」という3つのテーマに焦点を結んできたといえる。「世界性」とは、戦場になったか否か、参戦したか否かを問わず、大戦の影響がグローバルに波及し、世界規模の社会の地殻変動を引き起こしたことを意味する。「総体性」が意味するのは、大戦が戦場における戦闘員の経験だけでなく、銃後の非戦闘員の日常生活や知性・感性のありようにまで根本的な転換を迫る経験であったこと、そもそも、大戦においては戦場と銃後のある種の一体化が進行し、国家による動員のみならず市民社会による協力のモメントも強力に作用したことである。「継続性」が強調されるのは、「戦前」「戦後」との間の断絶を否定はしないものの、むしろ今日にまで至る世界の歩みを決定的に規定した出来事として、戦間期以降にさまざまな形で流れ込んでゆく「終わらぬ戦争」「未完の戦争」として、大戦を把握すべきとの認識ゆえである。ここには、日本で依然として支配的な第二次大戦中心の現代史理解を再考する狙いも含意されている。

2011年度はとりわけ日本(アジア)にとっての第一次世界大戦の意味について、多くの知見が得られた。従来日本では第一次世界大戦についての総合的な研究はほとんど行なわれておらず、例えば第一次大戦中の日本の出来事としても、青島の占領、対華21か条の要求、シベリア出兵、五・四運動が何の関係もないかのように、ばらばらに記述されるというようなことが常態化していた。しかしながら、実はこれらはすべて第一次世界大戦の一環なのであり、さらに日本にとっての第一次世界大戦は日露戦争の戦後処理という意味をもっており、また英米と熾烈な外交戦が繰り広げられていたという点では、第一次日米戦争でもあったという複層性が明らかになった。一見異なった諸現象の間に、第一次世界大戦という軸を入れることにより、こうしたグローバルかつ超領域的な連関を見出し、それによって「総体」として連動して動く20世紀的な「世界」の一端をさらに明らかにしていくことは、本研究の今後の課題でもある。

7. 共同研究会に関連した公表実績 (出版、公開シンポジウム、学会分科会、電子媒体など)

上述のように、今年度の研究会のうち、合評にあてた6回はすべて公開シンポジウム形式とした。これらのシンポジウムには合計300名の参加者があった。また昨年度も従来に引き続き、第一次世界大戦についての全学共通講義(リレー形式)を後期に行なっている。なお今年度はとりわけ、アジアにおける第一次世界大戦の諸相に焦点を当てた。

8. 本年度の共同利用・共同研究の参加状況

区分	所属機関数	参加人数	延べ人数
学内	5	8	44
国立大学	8	10	23
公立大学	1	1	15

私立大学	6	5	12
大学共同利用機関法人	0	0	0
民間・独立行政法人等	2	2	17
外国の研究機関	1	1	5
(うち大学院生)	(1)	(4)	(29)
計	22	27	116

※当該年度の共同利用・共同研究参加者の所属機関数、参加人数、延べ人数を区分に応じて記入して下さい。

※「学内」の所属機関数は「学部数」等を記入して下さい。

※参加人数及び延べ人数の算出方法は、以下の例に基づき算出して下さい。

(例)

- ・ 1つの共同利用・共同研究課題で2人を共同研究員として3日間受け入れた(参加した場合) : 参加人数2人、延べ人数6人

9. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

論文数	13
上記のうち国際学術誌に掲載された論文数	3

※研究者がファーストオーサーであること。学内の紀要等に発表されたものを除く

なお、高いインパクトファクターを持つ雑誌等に掲載された論文がある場合、その雑誌、掲載論文、そのうち主な論文の詳細等

掲載雑誌名等	論文名	発表者氏名
<i>Bochunmer Jahrbuch zur Ostasienforschung</i>	Der Erste Weltkrieg und das japanische Empire	山室信一